

名情研だより

第18号 平成24年7月
名古屋市情報教育研究会



子どもと向き合う名情研を

名古屋市情報教育研究会会長
佐野 治之 (振甫中)

1964年。東京オリンピックが開かれたとき、小学生だった私は、教室にぎっしり詰め込まれ、観音開きの扉が付いた20型くらいの箱形白黒テレビで、競技を観戦した思い出があります。また、日本映画史上、これまでに一番観客動員数が多かった映画は、故市川崑監督の「東京オリンピック」の記録映画だそうです。その観客動員数は一般観客750万人、学校動員1600万人の合計2350万人と聞きます。小学生

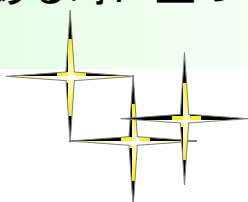


だった私も、学校から近くの映画館へ見に行きました。一台のテレビからの放送に全校が釘付けになり、1本の映画に国民が見入る時代でした。

それからわずか半世紀、どの家庭でも大型のデジタルテレビが置かれ、好きなときに家庭で撮りだめた好きな番組が見られるようになりました。授業で使われるNHKの学校放送などは、学校で撮りだめる必要もなく、インターネットを通し流れてくるコンテンツとして、いつでも好きなときに見られるようになりました。電子黒板を始め、デジタル化された様々な教具が急速に発達し、授業の様態も変わろうとしています。先が見えない状況をどうとらえ、どう示唆していくか、私たち名情研の使命だと思えます。

これまで名情研は、授業に特化した研究をしてきた経緯があります。しかし、現在名古屋市には、先生方の多忙化を軽減し、子どもとふれあう時間を確保しようとするプロジェクトがあります。その中では、校務の効率化を図るICTの導入も大きな課題になっています。授業だけでなく、大きく「子どもと向き合う」という視線でものが言える名情研が求められていると思えます。

今、私たち名情研は、その手腕が試される、やりがいがある時に立っていることを実感しています。がんばりましょう。



平成24年度 名古屋市情報教育研究会 研究主題

「共に学び、確かな学力と豊かな心をはぐくむ情報教育」
—情報活用能力の育成とICTを活用した分かる授業の実現をめざして—
研究部長 野村 雅紀 (宮根小)

「子どもたちが基礎基本の力を身に付けるために、分かる授業を行いたい。」という思いは、すべての教員にとって共通の思いではないでしょうか。その結果、さまざまな手法を探り、研究を重ね、授業に臨まれることと思います。授業の要点を押さえる指導法はいろいろありますが、ICTを活用した指導はとても有効な指導法の一つです。

写真は、小学校4年生の算数「角度」の授業の一場面です。実際の分度器を拡大して映し、正しい角度の測り方や分度器の目盛りの読み方を指導しています。ICTを活用することで、クラス全体で学習情報を共有したり、学習に集中させたりすることができます。



本研究会では、このようなICTを効果的に活用した分かる授業づくりのほかに、子どもたちが課題解決に必要な情報を効果的に集めたり、整理した情報を使って意欲的に発信したりする授業づくりを行っています。子どもたちの情報活用能力の育成と、分かる喜びを味わう姿を目指して、「情報活用能力研究部」「ICT活用研究部」の二つの部会で実践研究を進めていきます。

情報活用能力研究部

学習課題を解決する過程で、情報を収集し、それらを交換したり、整理・加工した情報を共有したりする様々な情報の交流を行います。学習のどの過程において、どのような情報の交流を行うことが、自らの気付きや考えを深める子どもを育成するのに有効であるかを研究していきます。

ICT活用研究部

ICTの特性を理解した上で、授業の中で効果的に活用する指導の在り方を探究します。ICTを学習の中のどの場面でもいった活用をすると学習のねらいを達成する上で有効であるかを研究していきます。

各研究部の活動の様子や情報教育に関する新しい情報は、名古屋市情報教育研究会のホームページでも発信しています。

アドレスは、<http://www.meijoken.com/>

名情研

検索

